瀬戸内町立図書館・郷土館
紀　要

第７号

嘉徳アサト遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 森田　太樹

2012
瀬戸内町立図書館・郷土館

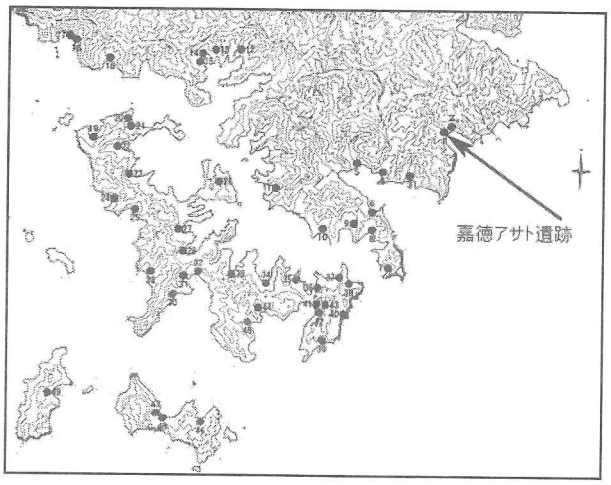
嘉徳アサト遺跡

森田太樹

Ⅰ　はじめに

嘉徳アサト遺跡（嘉徳遺跡）は，鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳集落の嘉徳川河口付近の砂丘に位置します。１９７４年（昭和４８年）に発掘調査が行われ，縄文時代後期を中心に，縄文時代中期～晩期にわたって形成された遺跡であることがわかりました。

今回，瀬戸内町教育委員会のご厚意により，嘉徳アサト遺跡及び出土遺物を見学する機会を得たので，１９７４年の発掘調査報告をもとに遺跡の概要を紹介したいと思います。



嘉徳アサト遺跡の位置（※１）

嘉徳アサト遺跡空中写真（※２）

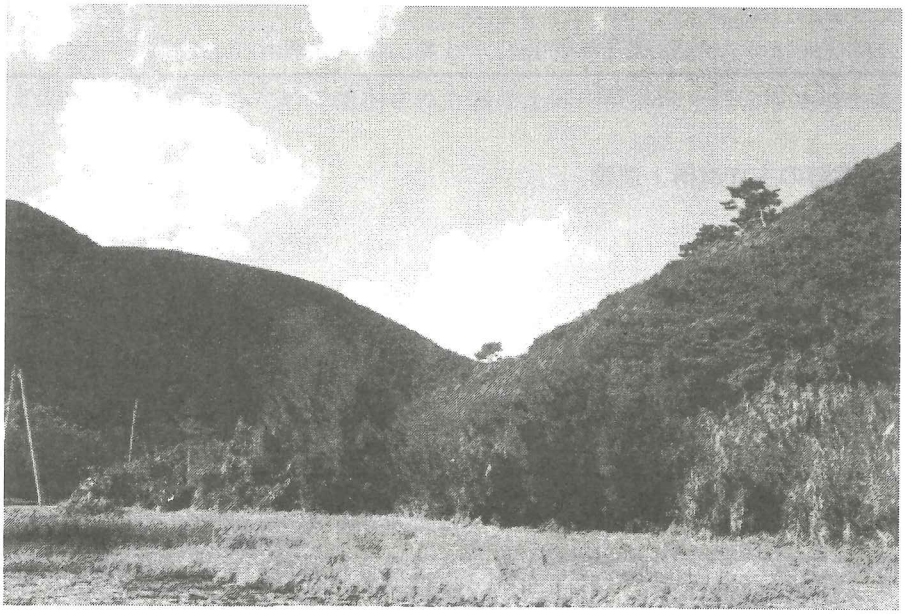
Ⅱ　嘉徳アサト遺跡の発見と調査

嘉徳アサト遺跡は，１９７３年（昭和４８年）８月に砂利採取業者が嘉徳砂丘の砂を採掘した際に発見されました。瀬戸内町教育委員会は，県文化課（現文化財課）に連絡し，翌１９７４年（昭和４９年）当時県文化財専門委員であった河口貞徳氏に調査の要請を行いました。調査は，瀬戸内町教育委員会が調査主体となり，河口貞徳氏，町内外の教員や大学生・役場職員，そして古仁屋高校郷土クラブの協力得て，８月３日から１６日までの１４日間にわたり実施されました。調査が行われた砂丘は，南北５０m，東西７５m，面積は約２，５４２㎡で，そのうち南側の９７１．５㎡は砂の採掘によって削り取られ，遺跡範囲の半分以上が消失していたと推定されています。

調査報告には，真夏の強い日差しや悪路の往復，業者からの調査中止要請など多くの困難があったことが記されています。しかしながら，調査を担当された方々の並々ならぬ努力により発掘調査が進められ，多くの貴重な遺産が現在まで残されることとなりました。

時代		年代（年前）	日本の主な出来事	主な遺跡（●は県外）
旧石器時代		25,000	港川人	ガラ竿遺跡（伊仙町） 姶良カルデラ大噴火
縄文時代	草創期	13,000	土器や弓矢を使い始める	
	早　期	10,000	竪穴住居が一般化する	上野原遺跡（霧島市）
	前　期	6,000	縄文海進（海面上昇）	
	中　期	5,000	火焔型土器がつくられる	●三内丸山遺跡（青森県）
	後　期	4,000	大規模な貝塚が形成される ストーンサークルがつくられる	**嘉徳アサト遺跡** 宇宿貝塚・サモト遺跡（奄美市） 面縄貝塚（伊仙町） ハンタ遺跡（喜界町） ●市来貝塚（いちき串木野市）
	晩　期	3,000	海面の低下	喜念貝塚・犬田布貝塚（伊仙町） 住吉貝塚（知名町）
弥生時代		2,300	倭国大乱 この頃卑弥呼が邪馬台国を治める	吉野ヶ里遺跡（佐賀県）

□ 嘉徳アサト遺跡の営まれた時期



現在の嘉徳アサト遺跡（※3）

解　説（その１）

遺跡(いせき)

遺跡とは，昔の人々の活動の痕跡のうち，考古学研究の資料となったものや，文化財として保護されたものを指しています。現在では，旧石器時代から第二次世界大戦の軍事施設にいたるまで，さまざまな人間の活動の痕跡が遺跡として調査の対象になっています。遺跡は，主に　遺構・遺物・遺物包含層から構成されています。
遺跡名は，多くの場合，所在地の小字名から名付けられます。

遺構(いこう)

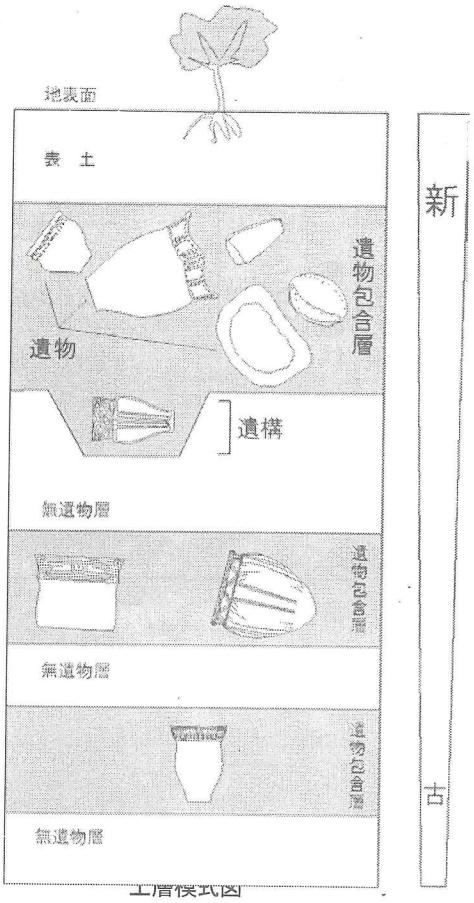
遺構とは，昔の人々の活動により土地に残された痕跡（不動産）を指しています。例えば，**竪穴住居跡・土坑**（柱穴跡など）や**水田跡・道路跡など**土地と一体化して動かすことができないものです。残念ながら，縄文人の住まいであった竪穴住居跡の柱や屋根に葺かれていたと考えられる植物類は腐りやすいためほとんど残ることがなく，地面に掘られた竪穴部分や柱穴の跡だけが発見される場合が多くみられます。

遺物(いぶつ)

遺物とは，昔の人々の活動の痕跡のうち，持ち運び（移動）が出来るものを指しています。例えば，**土器や石器**などのように人が製作・加工したもの（人工遺物）や人が食料とするために持ち込んだ**魚貝類・獣・木の実などの食べかす・ゴミなど**（自然遺物）があります。

遺物包含層(いぶつほうがんそう)

遺物包含層とは，**土器や石器などの遺物を含む土層**のことを指しています。包含層・文化層と呼ぶ場合もあります。長期間または断続的に遺跡が営まれた場所では，複数の遺物包含層が形成されることもあり，土質や色調によって分けることができます。遺跡の調査では，**下の層から出土するものほど古く，上の層から出土するものがより新しい**という考えを基本として出土する遺物の新旧関係を判断します。嘉徳遺跡では，遺物包含層が3層確認されています。



土層模式図

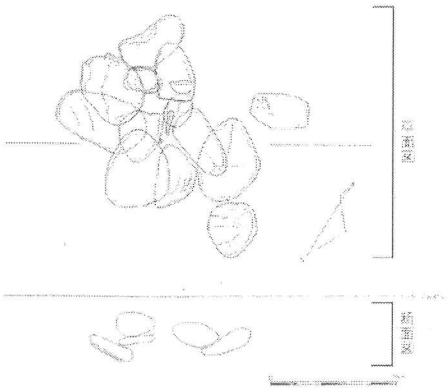
Ⅲ　嘉徳アサト遺跡の主な遺構・遺物

●遺　構

①石　組（いしぐみ）

石組は，直径１０cm～３０cmほどの石が集中して見つかった場所で，集石遺構とも呼ばれます。調査では，１３箇所確認されました。石組は，数個から多い場所では約６０個もの石で構成されます。多くの石にススなどが付着し，火を受けた痕跡があることや，周辺から炭や獣骨・魚骨などが見つかっていることから調理施設であったと考えられています。火で熱して高温になった石の中に，葉っぱにくるんだ肉などを入れて蒸し焼きにする石蒸し料理や，土器などを使って煮炊きをするための炉として使用されたのでしょう。石組を伴わずに，火を受けて地面が赤く変色し

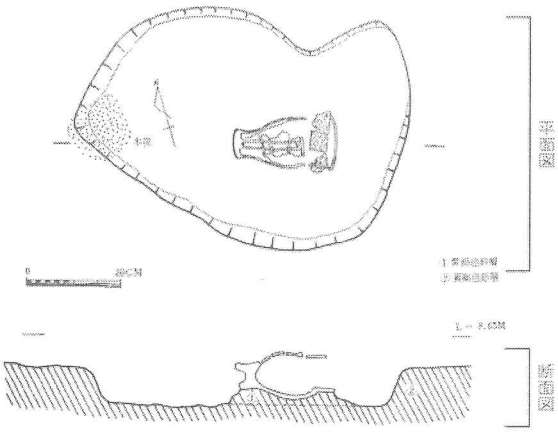
た痕跡だけが残る場所（焼土）や木炭が集中した場所も約２０箇所確認されました。



石　組（※4）

②土　坑（どこう）

土坑とは，柱穴や貯蔵用の穴など，人が何かの目的をもって掘った穴の総称です。ピットとも呼ばれます。同じ穴でもヒトを埋葬するために掘られた墓穴のことは土壙（どこう）と書きます。嘉徳アサト遺跡では，特殊な壷形土器が納められた土坑が特徴的です（右図）。確認された土坑６箇所のうち４箇所が上部や内部に石組を伴うものでした。また，推定径約２ｍの土坑の存在も報告されています。規模から考えると竪穴住居跡だったのかもしれません。



土　坑（※5）

●遺　物

①土　器

土器は粘土を焼いて作られた容器で，主に煮炊きに使用された深鉢形土器が大部分を占めています。水などの液体を貯蔵するために使用された壷形土器や深鉢形土器よりも背の低い浅鉢形土器も少量出土しています。

嘉徳アサト遺跡出土の主な土器型式

〈縄文時代中期〉　面縄前庭式

〈縄文時代後期〉　面縄東洞式　市来式　類市来式　凹線文土器　嘉徳Ｉ式Ａ
嘉徳Ｉ式Ｂ　嘉徳Ⅱ式　面縄西洞式

〈縄文時代晩期〉　喜念Ｉ式　宇宿上層式

◆土坑から出土した二重口縁壷◆

嘉徳アサト遺跡から出土した土器で最も特徴的な遺物は，二重口縁壷と呼ばれる土器です。文様の特徴は面縄東洞式に該当するもので，すぼまった口縁部の外側に，さらに外に開いた口縁部を設けた高さ約２０cmの土器です。口縁部と底部には紐を通すためと考えられる小さな孔があり，携帯用の土器と考えられています。面縄東洞式土器でこのような形態のものは，

他に例がなく独特な土器といえます。遺跡の西側では方形の石囲いから１個，東側では土坑の中から１個の計２点が発見されました。特に，東側の土坑から発見された個体は，横倒しになった状態で周囲には火を焚いた痕跡があることから呪術的な儀式に使用されたと考えられています。当時の人々はどのような祈りを込めていたのでしょうか？

◆市来式土器◆

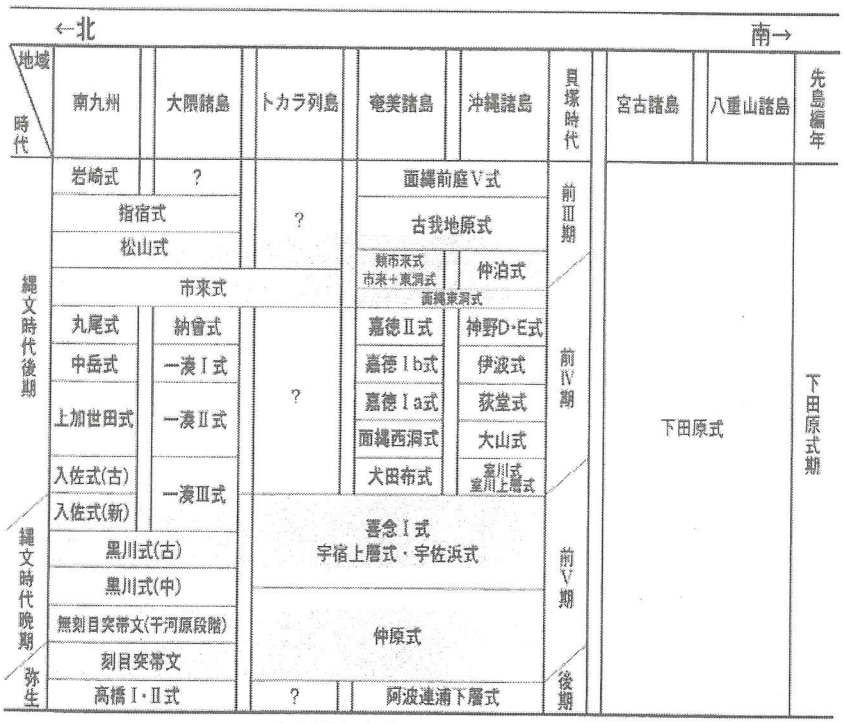
市来式土器は，縄文時代後期に南九州を中心に分布した土器です。１９７４年の調査により破片が５点確認されました。この市来式土器と面縄東洞式土器が同じ土坑内から発見されたことから，面縄東洞式土器に縄文時代後期という年代的位置付けを与えることが可能になりました。

解　説（その２）

土器型式（どきけいしき）

土器は，粘土を材料としているため，さまざまな形や文様を作ることができ，石器などに比べて形や文様が比較的短い期間で移り変わります。また，壊れやすく，頻繁に作られるため遺跡から多く発見されるという特徴があります。しかし，昔の人々が毎回違う形，違う文様の土器を作っていたわけではありません。ある時期のある一定の範囲（地域）では，共通した形・文様をもった土器が作られていたことがわかっています。例えば，縄文時代後期（時間）の奄美諸島（空間）の遺跡では，同じような形・文様を持った土器が発見されます。縄文時代の土器研究では，同じ特徴をもつ土器のまとまりを「型式」と呼び，その土器が最初に出土した遺跡や土器の特徴をはっきりと確認できる良好な資料が出土した遺跡（標式遺跡）にちなんだ型式名が名付けられます。

嘉徳Ⅰ式A土器，嘉徳Ⅰ式B土器・嘉徳Ⅱ式土器は，嘉徳アサト遺跡の調査によって良好な資料が確認されたことから名付けられました。



土器編年表（※６）

土器編年（どきへんねん）

考古学の研究では，土器の新旧関係（相対年代）や地域的広がりを整理する作業を土器編年と呼んでいます。編年研究の成果は，遺跡や遺物の年代を推定する「ものさし」として利用されています。

○○年前といった具体的な年代（絶対年代）を調べるために放射性炭素年代測定法などの科学的分析も多く利用されます。

②石　器

石器とは，石を材料とした道具です。嘉徳アサト遺跡では，叩石が最も多く，次いで石斧が多く出土しています。そのほかに，石皿・砥石（といし）・鑿型（のみがた）石斧・鑿型石器などが出土しています。

嘉徳アサト遺跡出土の主な石器

石　斧（せきふ）

石斧には，石を打ち欠いた打製石斧，全体を研磨した磨製石斧，刃の部分を研磨した刃部（局部）磨製石斧などがあります。磨製石斧は，木の伐採，削平など，打製石斧は，土掘り具として使用されました。多くの石斧は，木製の柄に取り付けて使用したと考えられます。

叩　石（敲石・たたきいし）

手に握り，ハンマーとして使用した石器です。木の実を打ち割りや石器の製作に使われた道具で，円形，棒状のものが多く見られます。叩いた部分には，デコボコとした痕跡が残ります。

磨　石（すりいし）

石皿の上で木の実などを磨りつぶすための道具で，円形・楕円形のものが多く見られます。磨りつぶしなどを行ったことにより表面がつるつるしています。一つの石器に，磨る・叩く，両方の痕跡が残っているものあります。

石　錘（せきすい）

石製のオモリです。網に付けたもの，釣り用のものなどが考えられます。

③自然遺物

自然遺物は，主に石組内部やその周辺から獣骨・貝類・イノシシの歯などが発見されています。出土量は少ないです。

④装身具

石製垂飾品（せきせいすいしょくひん）

長さ３㎝，幅２．１㎝，厚さ０．７㎝の紅色の円礫をわずかに研磨し，孔をあけたものが１点出土しました。紐を通して首飾りとして利用したと考えられます。魔除けなどの意味があったことも考えられます。

Ⅳ　嘉徳遺跡や奄美諸島の遺跡からみる縄文時代後期頃のくらし

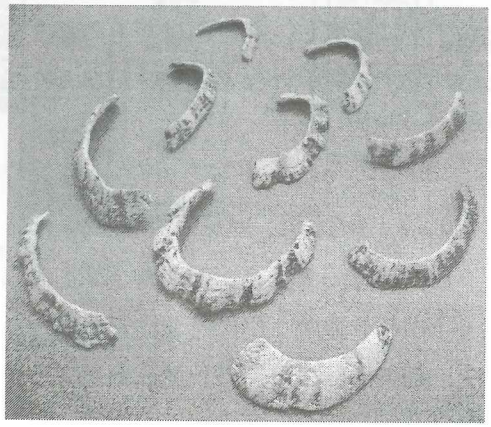
この頃の奄美諸島の主な遺跡として，内陸部では，喜界町ハンタ遺跡・天城町下原遺跡・知名町石原遺跡，海岸付近では，奄美市宇宿貝塚・長浜金久第二遺跡・下山田Ⅱ遺跡・伊仙町面縄貝塚群・和泊町西原海岸遺跡・知名町住吉貝塚・神野貝塚などがあります。奄美大島では，砂丘地に立地する例が多く見られます。長浜金久第二遺跡・サモト遺跡・下原遺跡・住吉貝塚など竪穴住居跡の発見例も増加します。

●食生活

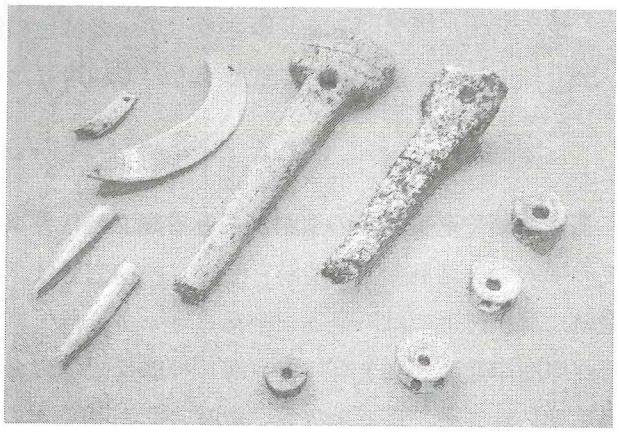
各島の遺跡の調査成果から，当時の人々は海では魚貝類やウミガメ，陸ではドングリなどの木の実やイノシシなどの獣・鳥類・小型哺乳類を捕獲して食料としていたことがわかっています。遺跡から出土する魚類・哺乳類などの脊椎動物遺体研究によると，奄美ではリーフ周辺に生息する多種多様な魚類を捕獲し，沖縄本島周辺ではブダイのようなやや大型の魚類を中心とした漁撈活動が行われていたようです。嘉徳アサト遺跡でも貝類やイノシシの骨などの自然遺物が出土していますが，奄美大島北部の遺跡で比較的多く出土している状況からすると，量的には少なく対照的です。奄美市住用町サモト遺跡でも自然遺物の出土が少なく同様の状況がみられます。その理由としては，廃棄場所が別にあったことや土壌の影響により遺物が残りにくかったことが考えられます。一方では，調査報告でも指摘されているようにキャンプ地として利用されたことも考えられます。当時の人々の活動パターンや行動範囲については，未だ不明な部分が多いのですが，リーフの比較的発達した奄美大島北部ではイノシシなどの陸上動物とあわせて，リーフ内の魚類・貝類獲得にも重点を置いた生業活動を行い，ある時期（季節）になると丸木舟などで南部に移動し，木の実などの植物性食料獲得を目的とした採集活動を重点的に行っていたことも想定できます。嘉徳アサト遺跡において磨石・叩石・石皿などの植物加工用の石器が多く出土していることは植物性食料への依存度が高かったことを反映しているのかもしれません。

●装身具

この時期の奄美諸島の縄文文化の特徴を示すものとして，多彩な装飾品があげられます。オオツタノハ・ゴホウラを加工した貝輪（ブレスレット）やジュゴン・クジラ？などの大型海獣骨を加工したかんざし状製品，サメ歯・イノシシの牙製装飾品（ペンダント）などです。当時の人々は，サメやイノシシの強さの象徴である歯や牙を身につけることに，魔除けなどの特別な意味を込めていたのでしょう。貝類の研究によるとオオツタノハは，奄美諸島での生息地が明らかでないことから南西諸島のどこかの島から持ち込まれた可能性が考えられています。ゴホウラは，ヤドカリ等によりリーフの割れ目など採集しやすい場所に運ばれた貝殻を利用した可能性が考えられています。



オオツタノハ製貝輪（※7）



骨製装身具（※9）

●交流

人の交流ついても黒曜石や土器の移動からわかってきました。奄美・沖縄諸島の各島では佐賀県産の黒曜石や南九州・四国地方の土器がしばしばみられます。また，反対に奄美諸島の土器が南九州で発見されることもあります。丸木舟などによる航海技術を駆使し，本土と奄美・沖縄諸島間である程度の人々の往来があり，お互いの文化に影響を与えあっていたのでしょう。

V　おわりに

嘉徳アサト遺跡の発掘調査から約４０年経過した現在では，大学等による学術調査や開発事業に伴う緊急発掘調査により多くの遺跡の調査が実施されました。最近では，和泊町西原海岸遺跡・喜界町崩り遺跡や伊仙町面縄貝塚の発掘調査が実施され新たな資料の追加も期待されます。これらの情報を基に奄美諸島の土器編年も再検討が行われる時期にきており，昨年から，瀬戸内町立郷土館においても嘉徳遺跡出土土器の再整理作業が行われています。膨大な量の遺物を整理することは大変根気のいる作業ですが，この地道な作業が奄美諸島先史時代の解明につながるものと思います。

ぜひ嘉徳アサト遺跡や郷土館を訪ねて実際に遺跡や遺物を眺めながら，当時の人々の生活を考えてみてはいかがでしょうか。

注

1　鼎編　2005 を一部改変
2　国土交通省国土画像情報　昭和 52 年撮影
3　鼎丈太郎氏提供
4・5　河口他 1974「嘉徳遺跡」
6　新里ほか 2008 を一部改変
7・8　住吉貝塚出土品

〈引用参考文献〉

天城町教育委員会　2004　『下原（Ⅰ～Ⅳ）遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　天城町教育委員会

伊藤慎二　2008「琉球縄文土器（前期）」『総覧　縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画　『総覧　縄文土器』刊行委員会

伊藤慎二　2011「先史琉球社会の段階的発展その要因－貝塚時代前Ⅰ期仮説－」『先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～』考古学リーダー19　六一書房

大西智和　1998　「鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡出土土器の再検討」『南日本文化』第 31 号　鹿児島短期大学附属南日本文化研究所

鹿児島県教育委員会　1984『長浜金久遺跡』－新あまみ空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（31）　鹿児島県教育委員会

鹿児島県教育委員会編　2006『先史古代の鹿児島　遺跡解説』通史編　鹿児島県教育委員会

鹿児島市教育委員会　1988『草野貝塚』－宅地造成に伴い第１次・第２次緊急発掘調査報告書－　鹿児島

市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）　鹿児島市教育委員会
笠利町教育委員会　1979『宇宿貝塚』鹿児島県笠利町文化財調査報告書　笠利町教育委員会
鼎 丈太郎編　2005　『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第１集　瀬戸内町教育委員会
河口貞徳　1974　「奄美における土器文化の編年について」　『琉大史学』第６号　琉球大学史学会（1974『鹿児島考古』第９号　鹿児島県考古学会の再録）
河口貞徳　1982　「奄美諸島の文化」『縄文文化の研究』第６巻　続縄文・南島文化　雄山閣
河口貞徳　2005「嘉徳遺跡」『先史・古代の鹿児島　資料編』　鹿児島県教育委員会
河口貞徳・上村俊雄・多々良友博・平島勇夫・肱岡隆夫 1974b　「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第 10 号　鹿児島県考古学会
九学会連合奄美大島共同調査委員会編　1959　「奄美大島の先史時代」『奄美』－自然と文化－　日本学術振興会
黒住耐二　2011「琉球先史時代人とサンゴ礁資源－貝類を中心に－」『先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～』考古学リーダー19　六一書房
新里貴之ほか　2008　「奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島土器の蛍光 X 線による胎土分析－縄文時代後・晩期資料を中心に－」『廣友会誌』第４号　廣友会
住用村教育委員会　1984『サモト遺跡(2)』　住用村文化財調査報告№.２　住用村教育委員会
高宮廣衛　1988　「嘉徳Ⅰ式Ａ土器」『日本民族・文化の生成１』永井昌文教授退官記念論文集　永井昌文教授退官記念論文集刊行会
高宮廣衛・仲宗根求・宮里信勇　1987『沖国大考古』第９号－沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その３）－　沖縄国際大学文学部考古学研究室
高宮広土　2011「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したのか：『貝塚時代前Ⅳ期』説」『先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～』考古学リーダー19　六一書房
田中　・佐原真編　2002「日本考古学事典」三省堂
樋泉岳二　2011「琉球先史時代人と動物資源利用－脊椎動物遺体を中心に－」『先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～』考古学リーダー19　六一書房
堂込秀人　2004　「琉球列島縄文時代後期土器の系譜－古我地原式土器の認定と細分から－」　『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』　河瀬正利先生退官記念事業会
堂込秀人　2004「南九州・奄美・沖縄の旧石器から縄文時代の考古学の課題－合同学会の成果と今後の課題－」『第５会沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集〈20 年の成果と今後の課題〉』沖縄考古学会・鹿児島県考古学会

○執筆者（執筆順）

森田　太樹　　（知名町教育委員会）

平成24年3月発行

瀬戸内町立図書館・郷土館紀要　第7号

■発行　瀬戸内町立図書館・郷土館
〒894-1507
鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋1283-17
電話　0997-72-3799／fax　0997-72-3999

■印刷　上　野　印　刷
〒894-0006
鹿児島県奄美市名瀬小浜町8－22
電話　0997-53-8039／fax　0997-53-8059